



燃やしつくす日日

上野英信集

3

上野英信集 3

燃やしつくす日

一九八五年九月二十五日発行

定価 二、七〇〇円

著者 上野英信

発行者 原田奈翁雄

発行所 径書房

東京都千代田区三崎町二―三―五

電話 ○三―二三四―四六〇八(編集)

○三―二六三―七〇一九(営業)

振替口座 東京一―三二七二六

印刷 明和印刷(株)

京美印刷(株)

製本 憐積信堂

上野英信集

3

燃やしつくす日日

径書房

• カバー絵・装幀 富山妙子

燃やしつくす日日

上野英信集③ 燃やしつくす日／目次

日本陥没期 7

一〇一日めの太陽 8

基地のなかの炭鉱 37

裂 65

たちのき 88

三池の子どもたち 115

河の下の坑夫たち 140

出稼ぎのふるさと 153

生きざまの歌 ときゅめんと・筑豊 I 187

筑豊の根をたずねて 188

さよなら三池 198

炭鉱節のふるさと 206

ある母の歩み 233

赤い十字架 241

ことは奪われ、いのち奪われ 257

私有の悲劇 261

犬死はよそう 264

生きざまの歌 266

人間崩壊の危機 276

合理化のはてに 279

「直轄夫」という名の「組夫」 282

山野鉾はなぜつぶれない 285

主婦籠城一四五時間 290

筑豊ありがたや節 300

狂える季節 303

わが町 306

にぎわい 308

あとがき 「死ぬるも地獄、生きるも地獄」 311

解説／プロレタリアートの夢 鎌田 慧 321

初出一覧 333

日本陷没期

一〇一日めの太陽

I

「京の上炭鉱まえ」――

バスをおりとバリケードだ。

せまいバス道路をはさんで、北は炭鉱の事業施設、南はこの炭鉱の社長安永栄三郎の邸宅である。坑内から炭車をまきあげる捲場^{まきは}、石炭を選びわけると選炭場などを中心に、さまざまな坑外施設や事務所などがごたごたとせりあっている北側のくろっばい丘も、頂きに青瓦をならべた高い堀にかこまれた南側の社長邸も、すっかり有刺鉄線にかこまれて、きびしく道路を隔絶している。

わたくしは今バスでとおひぬけたその道を有刺鉄線にそってひきかえし、労働組合の事務所へむ

かった。雨はいよいよ激しい。どしゃぶりの雨しぶきがほとんど風景の輪郭をかき消しているなかで、金属の棘とげだけが変にぎらぎらひかかってわたくしに突きささる。勤労課事務所のぬれた窓ガラスに、幾つものゆがんだ眼が、やもりのようにびったりと吸いついてわたくしを追う。このあたり、とくに嚴重なバリケードの向うまぢかに選炭機が、第二組合による生産をすこしでも落とすまいとして、狂暴に吠えたたてている。

それら、無数の棘と眼と音に背をむけて直角に道をまがり、わたくしは鉾員社宅地区の入口にある労働組合事務所へいそいだ。が、棹取しんしゅ小屋みたいな、バラックだての小さな組合事務所には、一本の赤旗もたっていないければ、ひとりの人影もみあたらなかった。もうかなり長いあいだ、まったく使用されていないことが一目であきらかなその小屋のまわりには、露草の花が雨にうたれながらひっそりと咲いているばかりで、おとずれた人間の足跡もない。

わたくしはすっかり当惑して、たずねるあてもなく、十棟ばかりの黒い長屋が地を這っているほうへと足をむけた。そしてぬかるみにはまりながら路地から路地へとうろつきまわり、どの家の軒にか闘争本部と書かれた看板でもあるだろうと、おろおろ探しまわった。けれどもそんな文字は、とうとうどこにも見あたらなかった。

どの路地にも人影はなく、どこの軒からも人声はきこえない。ただ、傾いた屋根をたたく雨の音だけが高かった。暗いむさくるしい軒下のあちこちに、板をうちつけて作った四角い植木鉢がならんでいる。それらの鉢には、山から掘ってきた、姿のととのわない松や柴の木などが植えられていた。樋のない、腐ったひさしから簾すだれをなしておちる雨だれにうたれて、しみるような緑の葉だけが、すがすがしく生きて踊っていた。

つい今しがた垣間みた、あの狂気じみた、ものものしい警戒と挑戦のまっただなかのこの静寂と沈黙を、わたくしは信じかねてとまどった。無期限ストライキ突入以来すでに九十九日、しかも明後七月六日からは九州炭労、つづいて全国炭労二十万人が、わが国労働運動史上はじめての全組織的支援スト突入を決している今日の、この無気味な静けさを、わたくしはどう受けとるべきか。大労組の決戦前夜の、わきたつような興奮と血走ったざわめきのルツボに接し慣れた者には、とうてい理解もできないこの重い沈黙……。

この静寂のなかにも、豪雨の底のこの低い傾いた瓦の下にも、たたかいの火がもえつづけていることを、外来者のわたくしにしろうじてそれと告げてくれるものは、ただわずかに、軒ごとに貼られている小さな一枚のビラだけであった。もうなかなば色あせた赤インクでザラ紙に書きこまれた、そのビラの文字は次のとおりであった。

父ちゃんがんばれ 主婦もがんばる
平和な家庭を 明るいヤマを築くため
炭婦協京の上支部

そのうちにやつとわたくしは、薪^{まき}でも割っているらしい重い力のこもった音が、しめきった土間のなかから、にぶく単調にひびいてくるのを耳にした。戸をあけると、四十がらみの頑丈な男が、斧^{よき}をやすめてゆつくりと顔をあげた。

「おれんがたの組合なら、Mさんとこか、Sさんとこたい」

彼はのっそりと腰をあげて、傘もささずに表へでた。よく研^とがれた斧が、磁石^{じしき}の針のように雨空

をきって方向をさし示した。

「けんどもが——」

彼は急に鋭い眼つきでわたくしをふりかえって、吐きだすような口調でつけ加えた。

「会社の組合なら、あの広っぱのはずれの小屋たい」

もちろんわたくしは「おれんがたの組合」へむかって歩きはじめた。歩きながらわたくしは彼のことばを、ゆっくりと口のなかでくりかえしてみた。すると心の底から、まるでうまい果実の汁がとけるような、なんともいえない笑いがこみあげてくるのを覚えた。

それは決して彼が、第一組合と第二組合を「おれんがたの組合」「会社の組合」といったからではない。わたくしはただ「おれんがたの」ということばがなつかしかったのだ。丸太に斧をたたきこむような、にぶくて重々しいひびきをこめたそのことばは、「おれのほうの」という意味ではなくて、「おれの家の」という意味である。つまり彼が「おれんがたの組合」といったそのことばの触感が、ちょうど「おれんがたの女房」「おれんがたのガキぼうず」という場合のそれと、まったくおなじ柔らかさ、温かさであったことがおかしかったのだ。

わたくしは京の上炭鉱へでかける前日、日炭高松労組をおとずれて、この指導的な大労組のひとびとが京の上闘争をどう受けとめているか、いろいろとさぐってみた。彼らはみな一樣に頑迷な安永資本をたたきつぶすために、このさい徹底的な支援闘争をたたかいぬかねばならぬと強調した。

「しかし——」とつけ加えて、ひとりの若い幹部は、その強い意志的な眉をぐつとよせて、次のように語った。「おなじ炭鉱労働者として、われわれはどんな協力も惜しまない。だが率直にいうと、

京の上炭鉱の労働者自身の犠牲が、あまりにも大きすぎはしないか。わずか八十名の組合員、しかも敵側にはそれ以上の人数をもつ御用組合があつて、ほとんど平常にちかい出炭を確保しておるといふ条件のなかで、どう頑張つてみたところで、一円か二円の賃あげしか勝ちとれはすまい。どこかに無理がありはしないか。また、炭労の闘争方針と戦術のなかにも、どこか誤りがありはしないか。なるほど三井三池は百十三日をたたかった。しかし、京の上という、あんな小ヤマの百日は大労組の千日ではないか。ひどいよ、あまりにもひどすぎるよ」

そのことばは、重い石のようにわたくしの胸につかえて痛んだ。だが、一歩たたかひの深部にふみこみ、たたかう魂のひとつひとつにふれはじめるやいなや、その痛みは霧のように消えていった。わたくしは、このたたかひが単なる賃金闘争ではなく、想像もできないほど封建的な暴力支配から人間を解放しようとする闘争であり、階級的団結を破壊の手から奪いかえそうとする闘争であることを知った。そして今日の大闘争にいたるまでの、相次ぐ人権擁護闘争と組織防衛闘争の口火をきつた昨年春の賃闘ストライキそのものが、賃あげの要求というよりも、われわれにもまた要求する権利のあること、そのためにたたかう権利のあることを、はじめて宣言した闘争であつたのだ。

このおもしろい権利宣言の日までの十年間、京の上炭鉱の労働者は、いかにたえがたい屈辱と圧制をしのんで生きてきたことか、そしてまたこの日から、いかに苦難なたたかひの道をきりひらいて前進しつづけていることか――。

京の上炭鉱（安永鉱業・京の上鉱業所）が福岡県鞍手郡剣町（現・鞍手町）に開坑したのは、敗戦後まもない昭和二十一年秋。その当時は従業員も二十名たらず、安永社長みずからもカンテラをさげて坑内にさがっていたという。もちろん選炭機もなければ、一台のトラックももたず、掘りだした

石炭はそのまま馬車につきこんで出していたという、豆つぶほどの零細炭鉱であった。

それが十年をへた今日では、従業員約百三十名、月産約三千トン、筑豊の中小炭鉱界に確固たる地位をしめるまでにのしあがり、安永社長の個人資産は七億から十億ともいわれ、炭界の不況で軒なみに中小炭鉱のつぶれていった三十一年度においてさえ、鞍手郡長者番付の一位をしめてゆるがなかった。出炭能率二十三トン、品質六千五百カロリー、しかも生産量の五〇％は三菱炭業が買いあげるといふ、高能率と好条件にめぐまれていることもあげられようが、徹底した暴力支配を裏づけとし、さらに公然と警察権力と手をむすんだ勤労行政こそ、安永資本の今日をきずきあげた最大最強の武器であったのだ。

「みんな、たえきれんで逃げだしてしましますと。入ったかと思うたら、もうでていきますと。たった二日か、三日で。多いときには七十人ぐらいい退職者のござすと。ひと月にですばい。それでくさ、町役場がしょっちゅう転出証明ばかり書かんならんもんで、『京の上はどげしたもんじやろかい、ああせからしか、せからしか』ち、こげ、いわっしゃるとですばい」

「そげなふうですけんで、いつでん、どげな不景気かときでん、直方のうがたの紹介所にや、京の上炭鉱の坑夫募集中ちゅう札の、かかっちゃうらんことのなかもん」

「そうたい、そうたい、そいで京の上に就職したかち頼んだらくさ、安定所の役人のいわっしゃるには、『どこかほかに働き口はなかとか？ どうしてよりによって、あげなヤマへいかんならんや？』ち、な、こげいわっしゃるとですばい、気の毒かそうにコソツツと」

雨に同じこめられて、アルバイトの土方しごとにてられない組合員や主婦たちは、苦しみにみちた過去を、とつとつとわたくしに訴えるのであった。

一銭の残業手当もくれず、見込み炭量を積みきるまでは、十二時間も十三時間も働きとおさねばならないこと。見込みのだせない日にはダイナマイト代まで給料からさしひかれること。係員はまったく現場もみずに、めくらめっぽう大きな見込みを命じること。たえきれず無断昇坑しかけた鉱員が、後からツルバシをうちこまれて死んだこと。だが、殺人犯のおえら方は、正当防衛という理由で無罪になったこと。保安監督官の検査があるときには、盗掘箇所を閉鎖してしまふこと。閉鎖のまぎわまで手あたり次第に石炭を掘りとらせるので、一時に多くの負傷者がでること。三十年六月一日の抜きうち検査のときには、まだ盗掘現場で一名ほど作業中であつたにもかかわらず、そのまま密閉してしまったこと。逃げおくれで閉じこめられた貝島五郎さんは、必死で壁をうちやぶって脱出したが、そのとき、彼に對しておえら方のいったことは「密閉箇所はもとどおりになおしてきただろうな？」という詰問だけであつたこと。木剣を手にした勤労係員が二、三人で組をつくつて、毎日きびしい出稼督励にまわること。私傷で休めば即座にクビになること。どんなにひどい公傷でも、十日も休めばむりやり勤労課にひっぱってゆき、^縛帯をひきはいで傷口をしらべ、「もうなおつとるから仕事にでろ」と、うむをいわせず強制的に入坑させること。……

このような、まるで数十年もむかしの監獄部屋を思わせるほどの圧制を男たちが語れば、主婦たちもまた、それにおとらぬ屈辱と痛苦にまみれた生活のたえがたさを語る。

子どもたちの遊び場をもうけてくれとたのめば、けがをすると気の毒だから、といって受けつけない。板ばりの部屋に畳をいれてくれとたのめば、火事をおこすと気の毒だから、といって受けつけない。陥落のために今にも家がたおれそうだから至急に地あげをしてくれと泣きついても、まだ十年は心配いらぬ、と相手にもしてくれない。配給所の物価が市価よりたかいから、もつと値さげ

をしてくれとたのめば、配給所は慈善事業ではなくて営利事業だ、きさまたちは会社に慈悲を強要するのかと居なおって、あげくのはては「文句があれば今すぐ社宅をあけて出てゆけ」とすぐむ。一事が万事こんな調子で、なにひとつしてくれないくせに、取りあげるほうは給料から天引きで、残酷むざんにむしりとる。月々家屋修理費を給料からさしひきながら、ガラス一枚いれてはくれな。いれてくれないだけならまだしも、家屋修理費とは別にガラス代（もちろん市価よりたかい）までさしひく。いれもしないのにガラス代をとるとはなにごとだと抗議すれば、これは破られたガラス代であって、新しくいれるガラス代ではないとうそぶく。電灯料もメーター制で、月平均二百四十〜三百五十円もさしひかれる。

賃金明細書の数字を主人とともに指さしながら、婦人部長のYさんは次のように話してくれた。「賃金はひくいうえに、さしひかれるものばかり多くて、あたいたち主婦の手にわたる金は、ほんのすずめの涙ほどですと。あんまりひどいので会社に交渉しましたら、U総務は『おまえたちは苦しい苦しいというが、焼酎に砂糖をいれてのんでおるではないか。ぜいたくにもほどがある。苦しかったら娘を売れ。おまえのところに二人も娘がおるではないか』と、こういうとです。つい先年まで警察署長をしておった、その男が堂々とこんなことをいうのです」

彼女はくやしそうに唇をかみしめた。

「U総務のこのことをきいたときほど、にえくりかえるような思いをしたことはありません。とにかくそんな鬼みtainな男ですから、ふたことめには、『文句があればさっさと出てゆけ』です。家の修理をたのめば、『おまえたちはぜいたくすぎる。家のない人間のことを考えてみる。そんな横着をいうやつは今すぐ出てゆけ』と、こうです。最後にいうことがなくなると、キサマとかオマ